
青の温度

ミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の温度

【Nコード】

N4903BA

【作者名】

ミナ

【あらすじ】

面倒なのにかわいい。会いたくないけど会いたい。幾つも転がる矛盾の中、交じり合って行く。恋愛願望ゼロの冷めた慧と、恋愛経験ゼロの熱いみどりの、じれったいプラトニックラブ（ラブになるまでにもかなり時間がかかります…）。「Home Sweet Home」のスパインオフですが、一応HSHを読まなくてもわかるようには書いているつもりです…つもり（汗）。

01（前書き）

HHスピノフです。

一応読まなくてもわかるように書いているつもりですが…つもりです（汗）。

都内のとある高級マンションの前。

デートの終わりに、礼儀として車で送ってきた慧（けい）は、帰るのを引きとめようとする女の仕草を冷めた目で見つめた。

今日あたりが潮時ではないかと、さきほどから勘が叫んでいる。

「ねえ、私、彼と別れようと思うんだけど…」

「どうして」

「どうして、って…慧とちゃんと付き合えたら、って思ってた通り」

思った通りの展開に、慧は小さく溜息をつく。

「……ごめんね。それなら、もう会わないよ」

「え、ちよつと…！」

まだ何か言い募ろうとするのに目もくれず、慧は運転席に乗り込むと、すぐに発進させた。

女が映っているだろうバックミラーは、交差点を曲がりきってしまいうまで見なかった。

かわいい子は嫌いじゃないし、綺麗なひとも嫌いじゃない。

けれど、いわゆる“女”は好きじゃない。

今別れたばかりの女のメモリを携帯から消去するのに、慧の気持ちは1ミリも動かない。

面倒なことは、嫌いだ。

どうせ、永遠なんて望めないのだから、面倒なことに首を突っ込んででも割に合わない、と思っている。

だから慧は、母親である妙からの見合い話を片っ端から撥ね退け、後腐れの無いほどのお付き合いしかしてこなかった。

そのくせ自分に乗り換えようとする女を冷やかに見ているのだから始末が悪いことこの上ないが、都合の悪い面に目を瞑るのは得意だ。そうやって厄介事には極力関わらず、32年間の今までの人生をそ

こそ上手くやってきたのだ。

これからもそうだと、疑いもしていなかった。

その時の慧は、少しだけセンチメンタルな気分だった。

二年前に亡くなった妹同然の従妹である唯（ゆい）の旦那だった男・

西岡 直輝にしおかなおきの恋愛相談に乗り、その上焚きつけてしまったのだ。

行き詰って落ち込んでいた直輝の背中を押すように、問題解決のために早退までさせたところだ。

間違ったことをしたとは思わないし、むしろ歓迎すべきことだとかわかってはいるが、どこか複雑な気分ではあった。

永遠を一度失った直輝が、再び大切な存在を見つけようとしていることが、唯の家族としては切なく、慧個人としては羨ましいと思う。羨ましいと思ってしまうのは、普段は目を瞑っているはずの、抱えっぱなしの矛盾が突きつけられるからだ。

永遠は無いと知っている。

けれど、どこかで永遠を望んでいる。

だが現実には永遠を望めない環境に身を置き続けている。

臆病なくせに貪欲に永遠を求めようとする直輝の姿に、本当に臆病なのは自分自身なのだと気づかされるのだ。

もやもやしたものを抱えながら、内科外来まで来ると、緊迫した空気が流れている。

受付カウンタでは、看護師の白井（しろい）と初めて見る女性患者が睨み合っていた。

背が小さいせいか、カウンタからようやく肩が見える程度の、しかも女の子と言ってよさそうな若い患者だ。

そうつと中に入ると、近くにいた看護師を捕まえて事情を聴く。

「どうかしたの」

「あ、四谷（よつや）先生、ちょうどいいところに。」

あの患者さん、どうしても西岡先生に、って言って。

白井さんが今は外してるって言ったんですけど、全然聞かないんですよ。

でも白井さんと張り合えるなんて、ある意味凄いですよね。竜虎相搏つ、みたいな……」

「ふうん……」

白井が竜で、あの患者が虎というところか。

まあ確かに、白井は年の割に頭が切れるし、言いたいことははっきり言う性格で、同僚と一部医師たちにも恐れられてはいる。だが竜虎相搏つとは言いすぎだろう。

「西岡先生今日はもう帰ったんだ。俺代わるから、あの患者さんも俺のとこ寄こして」

「あ、はい。わかりました」

まだ睨み合いを続けるふたりを尻目に、俺からしたらふたりともまだ仔細みたいなものだよ、と慧はひっそりと笑いながら診察室へ向かった。

初診時の問診票によると、患者の名前は鱸（すずき） みどり。

生年月日からするに年齢はまだ17歳、高校三年生だ。

堅物と言っているほど真面目な直輝と接点があるとは全く思えないそのプロフィールに、慧は首を傾げた。

しかし、白井と睨み合ってまで指名するとは、何か有るに違いない。名前をアナウンスして数秒後、診察室のドアが、壊れるのではないかと思えるほど勢いよく開いた。

慧はうつかり驚いてしまい、入ってきた患者 みどりをまともに見ることになった。

ちっこいな。

初見の印象は、それだ。

日本人男性の平均値よりも10センチほど高い慧からすれば大抵誰でも小さいのだが、みどりはその分を差し引きしても小さい。

しかも、感情がだだ漏れである。

みどりは、威嚇モードで毛を逆立てている猫のようなオーラを、全身に纏っていた。

慧の周りにはほとんどいないタイプのため、慧は思わずじっと見つめてしまう。

一方みどりは、慧の顔を見た途端に怯み、しかも観察されている事実に次第に戸惑ったような表情に変わっていく。

「座って」

椅子にかけるようにと慧が促すと、みどりははっとしたようにもう一度慧の顔を見る。

「あの、西岡先生は」

「どんな知り合い？」

みどりの質問に答えずに、慧が質問で答えると、みどりはむっとした表情をした。

慧は内心で、本当に直情型で感情がよくわかるな、とほくそ笑む。どうしようか迷っているらしく、ちらりと慧を窺うみどりに向かって、慧はわざとらしくため息をついてみせる。

「答えられないなら、診察しようか」

聴診器を見せつけて、暗に前を開けと脅しをかけてみる。

診察目的で来ていないなら怯んで口を開く気になるだろう、という慧の目論見通り、みどりは目を見開いて慧を見つめた。

「へ、へんた」

「医者に向かつてそれは無いでしょ。」

そもそも、患者のふりして何かしにきた君は、営業妨害だし」
自分の言動の矛盾をわかつてはいるらしく、みどりはぐっと言葉を詰まらせた。

だがそれで観念したらしく、みどりはおとなしく椅子に座ったが、今度は全身警戒モードでバッグを両腕で胸の前に抱えている。
大きくて少しだけつり気味の目が、ますます猫っぽく見える。

「で、直輝とはどんな知り合い？」

“直輝”と言うことで本当に親しいのだとアピールしたのは、きちんと通じたようだ。

みどりは一気に警戒を解くと、静かに答え出した。

その変わり身の早さに、慧は内心で密かに笑う。

「私は、直接の知り合いじゃないです。バイト先で顔を見たことがあるくらいで。」

…私の幼馴染みの子が、……好きな、ひと」

“好きなひと”という言葉を出すのに時間がかかったのは、特に直輝に対して悪感情を抱いているせいだろう。

そして多分無意識に、直輝を、あるいは好きなひとという存在自体を認めたくないと思っているのだ。

その幼馴染みの子が、よほど大事ならしい。

「それで、直輝に何を言いに来たの」

「…今はよく、わかりません」

素直な答えに、慧は小さく笑った。

直輝ではなく慧に会ったことで、沸きたっていた感情が少しは落ち着いたのだろう。

みどりは恐らく、本当に直輝に会っていたとしたら、徹底的に攻撃的な何かを口にしていただろうし、直輝はそれに潰されたと思われる。

今日、直輝を帰らせておいて正解だった。

「まあ、なんというか、直輝には俺も発破かけてやったし、…勘弁してやってくれないかな。」

ちなみに、これは純粋な好奇心なんだけど、その幼馴染みて、どんな子なの」

「有衣は、すごくいい子で、すごく優しくて、でも寂しがりで、傷つきやすくて…」

止め処ない。

みどりが延々語るのを聞きながら、唯と同じ名前だとか、その子も高校生なのだなとか、思うところはたくさんある。

けれど慧は、誰かについて夢中と言っても良いくらい語れるみどりが、少しだけ眩しく感じた。

ぎよつとしたのは、話しながらみどりの目からぼろぼろと涙が零れ出したからだ。

直輝の仕打ちがひどい、というようなことを訴え始めた頃から声の調子が怪しいとは思っていたが、まさか本当に泣くとは思っていなかった。

それも、多分本人は泣いていることに気づいていないのだろう、みどりは涙を拭おうともしない。

涙を武器と考えているような女は苦手だが、無意識に泣いてしまう女には結局のところ弱い、というのが男の常だ。

慧も例に漏れることなく、参ったな、と内心で苦笑を浮かべた。

「わかったから、ほら、泣かない泣かない」

言いながら、何がわかったのかわからないと思いつつも、デスクの上にあるティッシュを取って、そつと頬から涙を吸い取ってやる。

近づけた顔は、人形のように造作が整っており、涙を流す様は痛々しかった。

他人のために演技では無く泣けるみどりが、幼くかわいいと思った慧は、無意識にみどりの頭に手をやって撫でる。

特に意味も無くした仕草だったのだが、その瞬間みどりがかっと赤面したので、慧は逆に驚く。

だが次の瞬間、あたふたと慌てたみどりが後ろへ仰け反ったために反動で足が振り上がり、その爪先が慧の脛に直撃した。

「……」

反射的に手を離し、今更意味も無いのに足を庇う。

「ご、ごめんなさい！ あ、えっと、いろいろすみません、ありがとうございました！」

あ、とか言う暇も無く、みどりはわたわたとドアを開けて出て行ってしまった。

ちらと覗いていたみどりの耳が赤くなっていたことが、慧の表情を緩ませる。

良く知りもしない慧に対して話し過ぎたこと、泣いたこと、慧に頭を撫でられたこと、どれが赤面の一番の理由かな、などと考えておかしくなった。

「先生、顔があり得ないくらい崩れてますけど」

いつからいたのか、後ろからじととした目でこちらを見つめる白井が立っていた。

そんなに崩れていたかな、と足から離れた手で頬を擦る。

「いやなんか、かわいかったな、と」

「ロリコンですか」

「白井ちゃん、言葉の扱いには気を付けようね」

言いながら、いつも通りの自分が戻っていることに気づく。

先ほどまで抱えていたはずのもやもやしたものが、すっかり消え去っている。

言ってみれば、ただ自分の感情をまき散らしたただだったみどりだったが、もしかするとその素直さに助けられたのかもしれない、と思う。

「あ、今日のは点数付けないから、診察券だけ作ってあげて」「わかりました」

白井が立ち去ってから、みどりが座っていた椅子をもう一度見る。お約束な学生手帳の落し物なんてものは無かったが、なんとなくそれを残念に感じた自分自身に、慧は妙なおかしさを感じた。

01（後書き）

プチ腹黒（？）な慧と、純情なみどりです。

今のところ、というかしばらくの間はべつに恋愛感情がお互い全く無い感じなんですけど…。

どんなふうにかップルになっていくのやら、少し心配ですが（笑）。
かわいがっていただけると、嬉しいです^^

世の中は、今までも決して色づいてはいなかったけれど、ここところなぜかさらに色褪せて見える。

誘いかけてくるような細い指先が、背中や腕に触れるのが、今は煩わしい。

「…慧」

微かに不満を滲ませた声で名前を呼ばれ、慧はようやく思い出したように隣の女を見遣った。

その瞳に自分と同じ翳りを感じるのは、わざわざ慧がそういう相手を選んで傍に置いているからだ。

それなのにどうしてか、ため息をつきたい気分に襲われるのだ。

またひとつ、矛盾がコトリと音を立てて転がる。

「なんだか、気もそぞろ、って感じね。何かあった？」

聡い女は嫌いじゃない。

嫌いじゃないのに、今はそれさえも苛立ちを覚えさせる。

慧は、ひとの気持ちを見抜くのは得意な方だが、自分がそれをされるのは、嫌いなのだ。

不遜だと認めつつも、踏みこまれるのは苦手なのである。

「悪い。今日は帰るわ」

慧の言葉に仕方なさそうに笑うその表情と、それでも何も言わずに速やかに離れる体温が、今日は妙に癢に障る。

無理に引きとめようとするような言動をされれば興ざめで、求めているものがそこにあるのに、一方で本当に求めているのはこれではないと思う。

矛盾だらけだ。

危うく本当にため息をつきそうになった瞬間、不意に脳裏に甦ったのは、つい一週間ほど前に目にした、みどりの泣き顔。

「…なあ、他のひとのために泣いたことって、あるか？」

「なあに、それ。心理テストか何か？」

呆れたように笑うところを見れば、自ずと答えはわかるというものだ。

実際、慧自身だってそんな経験は思い出せないのだから、似たようなものだ。

みどりの、あのわかりやすい熱に、中てられてしまったのだろうか。たった一度会っただけの、しかも一回り以上年下の高校生相手に、影響を受けているようでは自分もまだまだ甘い、と苦笑う。

純度の違いをまざまざと突きつけられたような感覚に苦々しい思いを抱き、慧は女に軽く手を振るとそのまま部屋を後にした。

家に帰った慧を待ちうけていたのは、さらに気の滅入るものだった。フロントで声をかけられ、渡されたのは小包。

差出人の名前 四谷 妙（よつやたえ） を見ただけで、中身が何かわかってしまい、思わず手を引っ込めなくなる。

ずしりと重たく感じるそれは、何冊も入っている見合い写真だ。

妙は慧の母親で、気のない慧をせっつくように、こうして定期的に写真を送ってくるのである。

それも、直接だと慧が頑として受け取らないため、強行手段として宅配で送ってくるのだ。

こうまでされても、どうせ見ないことには変わりはないのだが、それでも親は親であるから無視もできない。

それに、多分妙は寂しいのだろう。

娘のようにかわいがっていた唯は亡くなり、実の息子である慧の嫁に期待したいのだろうという想像は容易い。

妙の持ち込もうとする見合いを全て撥ねつける慧に、それなら誰でもいいから誰か連れて来てみる、と怒られることも多い。

しかし当の慧としては、結婚など全く眼中にないため、単に頭痛の種となっているだけである。

慧からすると、人間が結婚をしたがるのは、あるいはさせたがるの

は、主に種々の安定性のためではないかと思う。

好きな相手と一生を共にしたいという気持ちは、強力な動機付けとはなるのだろうか、結局のところ単に付随するものに過ぎないだろう。

そして、それは同時に失うことへの恐れも植え付けるものだ。

少なくとも現時点では、慧を促す要素は無い。

時折、そんな自分自身を人間として欠陥品ではないかと疑うこともあるが、動かない心はどうしようもないのだ。

ようやくため息を吐き出すと、クロゼットの片隅に重ねられている開けないままの小包たちの上に、さらにまた新たな小包を重ねた。

発散できないものを抱えている時は、寝てしまいか、もしくは何かに没頭するに限る。

寝てしまつにはまだ早すぎる時間帯だったので、慧は新薬に関する研究論文を読むことにした。

それは、本当に偶然だった。

幾人か連名で書かれている名前の中に見つけた、“鱸”の文字。

通常英語で書かれている論文ではあるが、国内向けに日本語訳も添付されていたため、名前も漢字で書かれていたのだ。

今までは全く気にも留めていなかったが、思い返してみると以前に読んだ論文でも、同じ名前を目にしたことがあった気がする。

コンピュータを検索してみると、保存してある論文の中だけでも、何度が名前を見つけられる。

“すずき”という姓は珍しくも何とも無いが、同じ読みでも“鱸”はかなり珍しい部類に入るだろう。

まさか、という気持ちと、もしかして、という気持ちが交互に浮かぶ。

名前を気にしてしまう辺り、やはりもう一度くらい会ってみたいという気持ちが自分の中にあるのだと認めると、慧は急に楽しい気分になった。

職業柄、製薬会社とはパイプがある。

昼の休憩時間や診療終了後に、空いた時間を狙って複数の会社からMRがこぞってやってくるのだ。

時に必死に営業をしに来る場合もあるが、大抵は顔繋ぎの意味もあり、ほとんど雑談で終わる場合も少なくない。

それを利用して、聞き込みをすることにした。みた。

論文は第一薬品工業のもので、連ねられていた名前を見た限りどこかの大学と共同研究という形ではなさそうだったから、幾らか分が良。

それに何より、“鱸”という漢字が珍しいため、最初の段階で振り分けができ、簡単だ。

「研究員でさ、鱸さんっていない？」

鈴の木じゃなくて、魚の鱸って書く人。けっこう論文たくさん書いてる」

「あ、はい。よくご存知ですね」

「まあ、たまたまね。漢字珍しいし」

「そうですね。自分も、はじめて見ましたから」

「その人ってもしかして、娘さんいる？」

「はあ…、よくは知りませんけど。」

確か高校生の娘さんがいるというのは人伝に聞いたことがありま

すね」
一気に怪訝な表情になって慧を見るが、立場上何か言ってはまずいと思っ

ているらしく、何も言ってこないのが笑える。
仲野医院を長く担当しているMRは、大抵そのうち病院の雰囲気に合わせてかなり親しげに話してくれるようになるが、割と新しいMRは

そうもいかないのだ。
かしこまって、鯨張って、多分これ以上の情報は引き出せないだろう、と踏んだ慧は一応この場は諦める。

前の担当MRに連絡してもいいし、ライバル会社に聞いた方が落ち

てくる情報もあるし、他のひとに聞けば良い。

我ながらキャラに合わないことをしているという自覚は、もちろんある。

こんな風に誰か特定の人間に興味を示すなど、慧の中では異常事態とさえ言える。

ただそれでも、なんとなく関わってみたいという気持ちがいっこうに消えないのだ。

あの日、みどりは慧が既に忘れてしまった、またはもしかすると最初から持ち合わせていなかった何かを持っているのだと感じた。

それは慧に苦い想いを抱かせると同時に、清々しい想いを抱かせるものでもある。

それに、あの直情型の性格は、見ていて飽きないだろうな、と漠然と思う。

ずっと傍に置いておきたい、などと思う対象は今のところ誰もいないが、みどりがいたらいたで面白そうだ。

地道な、と言うには職権濫用すぎた感も否めない仕方で聞き込みを開始して二週間ほど。

第一薬品工業の鱸氏が、みどりの父親である可能性はほぼ100パーセントに近いことがわかった。

鱸氏はかなり家族を大切にしているタイプらしく、職場に家族写真がいつも置いてあるらしい。

肝心な娘の名前は出てこなかったため、確実なことはわからないが、写真を見たことのある人間から聞いた特徴は、ほとんどみどりと一致している。

思わずにんまりしてしまいそうになった慧は、表情を引き締めるのに苦労した。

あとは、仕掛けるだけだ。

変な言い方だが、病院からたとえ難題を突きつけられても、営業はよほどのことでない限り、NOとは言わない。

そして研究職の人間からすれば、営業がいるからこそ仕事が成り立つのであって、やはりよほどのことでない限り、NOとは言わないだろう。

今回のことにしたって、娘を大切にする父親なら多少躊躇はするだろうが、なにも取って喰おうというわけではないのだ。

だから、おそらくこの慧の要望も、案外あっさりと通るだろうという勝算はある。

「てわけで、ちょっと会ってみたいんだよね」

「はあ…あの、では、一度社に戻ってから、また連絡させてください」

「うん。よろしくね」

妙な要望を出された、と思っているのだろう。

冷や汗をかいて帰っていった若いMRをほんの少しだけ気の毒に思った慧だったが、こういうタイプほど無理が利くのだ、などとほくそ笑んでいたりもする。

さて、鱸氏はどう出るか。

彼の娘が本当にみどりだったとして、みどりはどう出るか。

みどりの反応を想像してみるだけでも、おかしい。

きっと、顔を真っ赤にして怒るか、あの大きな目で慧を睨むかするのだろう。

まだみどりだと本当に確定しているわけでもないのに、猫のようなみどりの様子を思い描いて、慧は小さく笑った。

02（後書き）

慧が動き出しました。

でも、恋愛感情からこのように動いているのではないのです。

好意は確かにありますが、それはまだ発展してはいません。

今のところ、みどりのことはマスコットの面白がって可愛がりたいだけなのです^^；

次回以降はみどり視点寄りも入りますので、話がだんだん動いていくと思います。

みどりが鱸家に生まれて、満17年と少し。

変わった苗字だと言われたことは星の数ほどあるけれど、それで特に良い思いをしたことも変えたいと思うような悪いことも無かった。しかし今はあえてご先祖様に問いたい。

なぜ、こういった理由で“鈴木”ではなく“鱸”を選んだのか、もしくは賜ったのか。

みどりは今猛烈に、この珍しい苗字が恨めしかった。

平日はいつもなら定時でなど帰らない父親が、珍しく早く家に帰ってきたのが事の始まりだった。

それだけでも普段と違うのに、今日はどうしてかみどりに対してちらちらと窺うような視線を寄越すのだ。

気になって食事も集中して摂れやしない、と問い詰めてみれば、帰ってきた答えはみどりの想像を軽く飛び越えたものだった。

「見合いしてみないか」

他にもいろいろと言葉を選びながら話してはいたが、要約するとつまりこういうことだった。

初カレもまだなうら若き高校生の娘に対して何を言っちゃってんのよ、とみどりは目を剥く。

「お相手もだな、いい人なんだぞ。お前、どこで見初められたんだろうなあ」

今時“見初める”なんて言葉を使うのはどうなんだ。

父親が娘に持ち出すにはあまりにもあんまりな話に、みどりは内心で思わずどうでもいい箇所につっ込んでしまう。

だいたい、高校生相手に見合い話を持ち出すような男のどこが“いい人”なのだ。

ほとんど啞然としてしまい、返す言葉も見つからず黙っているみど

りの態度をどう受け取ったのか、父親は早口で続きを話す。
そのお相手とやらは脳神経外科の偉い先生で、どこぞの病院の次期院長だそうである。

次期院長などという肩書きが付いているくらいなら、おそらく年齢もそれなりにいつているのではないか。

そんな相手に、どうして会わなければならないのか。

しかし、相手が病院の人間となると、話は少々厄介なのだ。

なぜなら、みどりの父親は製薬会社の研究員で、病院に対しては特に立場が弱いからである。

「お父さん、会社で頼まれたの？」

「う、その…まあ、そうなんだ。営業の若い人が、頼みに来てだなあ…。」

会うだけでもいいからって頭下げて、気の毒でなあ」

娘は気の毒じゃないのか、と言ってやりたいところだが我慢する。

いつもはみどりの交友関係に目を光らせているくらい溺愛型の父親なくせに、こんな話をするなんてそうとうな相手なのだろうと思っただからだ。

「…ほんとに会うだけだからね。でも、会ったらほんとにすぐに帰るからね」

渋々会うことだけ了承すると、父親は目に見えてほっとしたように息をついた。

「仲野医院って、名前は知ってるだろう？」

あそこはうちともけっこう大口の契約をしてくれてて」

聞き覚えのあり過ぎる病院の名前に、みどりはぴくりと反応した。

父親はまだ仲野医院についていろいろと話を続けていたけれど、もう頭に入ってきて来ない。

よりによって仲野医院とは。

名前を知っているところではない。

頭に血を上らせたまま襲撃まがいのことをして、しかも本来標的だった相手とは全然違う人の前で醜態を晒してしまったのだ。

診察の代金は請求されず、ただ帰りに診察券を渡されただけだったが、もう二度と行きたくない。

あの日の自分は、恥ずかしすぎた。いくら大事な幼馴染みのためとは言え、職場まで怒鳴り込みに行くこと自体、非常識である。

しかも初めて会った人を相手に感情を曝け出して、涙まで見せて、おまけに頭まで撫でられてしまうなんて。

思い出した途端に、あの瞬間の、優しい声と掌の感触が急に甦って、みどりは顔が熱くなるのを感じた。

性格が悪そうに見えるのに、けれどどこか優しくそうな面も見えた、あの男の名前は何だっただろうか。

できればもう二度と会いたくないし、忘れてしまいたいと思っているのに、名前を思い出そうとする矛盾に、みどりはため息をつく。

「それでその先生の名前はね、四谷先生というらしいよ」

さつきからずっと耳の中を素通りしていた父親の言葉が、意味を持つてみどりに届いたのは、その名前のせいだ。

あの日会った男のネームプレートに、“四谷 慧”と書いてあったのを、その瞬間思い出した。

まさか、と焦るが、会ったのは脳神経外科の先生だと言われたのだと思に至る。

内科の先生だったあの男とは違う人だ、とほっとした、その時だった。

「で、一応写真も預かってきたんだよ。ほら」

手渡された写真に、ちらりと興味なさげに視線を流したみどりだったが、顔を見た途端に思わず凝視する。

写っていたのは、紛れもなくあの日の男、四谷 慧だった。どうということだ。

あの日は確かに内科にいたのに、と思ったがすぐに、いやいや、今はそんなことが問題なのではない、と思いつく。

会社で頼まれたということは、病院側からコンタクトがあったとい

うことだ。

つまりこの場合、慧がみどりに会いたがっているという意味になる。

「…無理」

「え？」

「会わない！」

「ええ？ 写真見てダメって、どうしてだ？」

お父さんが言うのもなんだが、かなりカッコイイ男だぞ？」

それは、写真を見る前から知っている。

悔しいことに、確かに顔も造作もカッコよかった。

涙を拭かれ頭を撫でられたあの時、かなり接近していたのに、どアップに耐えられる顔だったのだから、間違いない。

けれど、それとこれとは別だ。

あんな醜態を見せてしまった相手に会うなんて、嫌だ。

それも、帰るときには靴の先で足まで蹴ってしまった相手だ、なぜ興味を示されるのかはつきり言って謎である。

まさかあれで怪我をしたとかは言うまい。

いい大人が高校生を脅すとも思えない。

そうすると、みどりに会いたがる理由がやはりまったくわからない。わからないだけに余計に会いたくない。

急に会わないと言い出したみどりに、父親は焦ったように縋りつく。

「みどり、頼むよ。営業さんが困ってるんだよ」

「でも嫌」

「みどり、営業さんはな、お父さんたちにとって神様みたいな人たちなんだよ」

「嫌だつてば」

「お父さんたちが頑張って研究したものを、営業さんが一生懸命売ってくれてるんだよ。」

だからな、つまりだな。

みどりがこうして生活できてるのも、みんな営業さんのおかげなんだぞ。わかるだろ？」

「それはわかるけど。でも会いたくない！」

情けない父親の哀れぶった声はまだ聞こえていたけれど、みどりは聞こえないふりをして自分の部屋に逃げ帰った。

とは言っても、実際のところ選択の余地は無いのだ。

研究員は自社の営業には頭が上がりず、その営業は病院に頭が上がらない。

わかりきっているその方程式は変わることが無いのだから、みどりとしては父親のためにも会うしかないのである。

それにしても、どうしてみどりのことをいとも簡単に見つけ出してきたのだろうか。

その答えは、翌朝あっさりと判明した。

「どうも、お父さんの名前の出てる論文を読んでもくれたらしいんだよ」

研究者としては嬉しいのだろう、父親は幾らか顔を緩ませてそう言った。

その瞬間、みどりはわかってしまったのだ。

ここまで短期間でみどりにたどり着いたのは、苗字のせいだ。

もしも“鈴木”であつたなら、決してみどりまでたどり着くことはできなかったに違いない。

そう考えると、みどりは自分の苗字を恨めしく思わずにはいられなかった。

医者という職業は、不規則で忙しい生活パターンであるらしく、会ったと決まったものの日程はすぐには決まらなかった。

そうこうしている間に、慧に出会う羽目になったもとの原因たち、つまり幼馴染みの有衣と相手の直輝はうまくまとまっている。

おめでたいことなのに、どうも釈然としない気持ちになったりしてしまつみどりは、今慧に会いたくないと思う。

慧は多分、人の気持ちを引き出すのがうまい人種なのだ。

だからこそ初めて会った時もするすると言葉を出してしまい、あげく泣いてしまったのだ。

今会ってしまったと、またあの日の二の舞になってしまう気がする。しかし、そう思った通りに運ぶわけではないのが人生なわけで、会いたくないと思っているその時に、日程はとうとう決定してしまった。

そしてみどりをさらに困惑させたのが、自分の行動だ。

会いたくないと思っっているくせに、会ったらすぐに帰ると決めているくせに、着ていく洋服をすぐに決められない。

ベッドの上に乱雑に重なっている洋服たちを見つめて、みどりはがりがり頭を掻く。

「あーもうっ、わけわかんない！」

クローゼットの中身が空っぽになるくらい、ほとんどの洋服がベッドの上にある状態だ。

あれこれ組み合わせせて体に当てて鏡でチェックしてみたり、好きなひととのデートじゃあるまいし、と思考は批判的なのに、結局そうしてしまう。

その上最終的に選んだ服が、一番お気に入りのものだったとくれば、最早呆れるしかない。

「ばかみたい」

言いながら、それでも決定を覆せない理由は何なのか。

男のひととふたりで会うというシチュエーションが初めてだから。

そんなむちゃくちゃな理由を付けて矛盾を片づけようとしていると、階下からそろそろ時間だと言う母親の声が聞こえてきた。

いよいよ出陣だ、などとまるで侍のような気持ちになる。

鏡の中の自分自身を覗きこみ、気合いを入れるように両頬を軽く叩くと、みどりは思い切りよくドアを開けた。

03（後書き）

今回はみどりメインでした。慧に会いに行くまでの経緯みたいな。会いたくないのに、どこかで会いたいと思ってしまう、みたいな複雑な心境なのです。

でも、恋ではないのです、しつこいようですが（笑）。

カッコイイ人に会うのに変な格好では行けないただのオトメゴコロですw

さ、次回は再会編です

今度の日曜日午後6時に、中央通り沿いのカフェモ力で。

慧がみどりに出した連絡事項はそれだけだ。

せつかく、みどりから会うという返事が来たのにもかかわらず、慧の都合がなかなかつかず随分時間が経ってしまった。

それでもなんとか最速で会える日を設定した、いや、無理矢理に捻じ込んだとも言える。

そんな苦勞をした後であるせいか、みどりの反応が楽しみで仕方が無い。

指定した時間よりも30分近く早く到着した慧は店の中には入らず、駐車場に停めた車の中から入口をただ見ている。

そうしているうちに、すぐ近くのバス停に停車したバスから降りてきたみどりが店の前に到着した。

時計を見ると、時間はまだ約束の時間の15分前になるうかというところだ。

想像していたよりも早い到着に、慧の口元が緩む。

時間にきちんとしている子はポイントが高い、などと勝手なことを考えている。

みどりは、すぐには店に入っていかず、入口の脇からこっそり中を窺っている。

身長が小さいせいで奥のほうまでは見えならしく、精いっぱい背伸びをしつつ窺う様子がおかしい。

「あ」

段差のあるところから足が滑り落ちた。

みどりは、慌ててきよきよと周りを見回して、誰も見ていなかったとほっとすると、もう一度店の中を覗きだした。

いい加減覗きは諦めて中に入ればいいのに、と思いつつ慧もまだ車を降りようとはしない。

悪趣味だとわかっていても、みどりの様子を眺めるのは飽きないのだ。

慧が日時と場所を指定したのだから、当然先に来ていると思っていたみどりは、少しだけ拍子抜けした。

15分前に到着し、様子を窺おうと店の中を覗いてみたが、慧の姿は無い。

奥のほうまで全ては見えないけれど、あの体躯だから多分座っていれば目立つと思うのだ、だから多分いない。

なんとなく先に店で待っているのが癪なような気もして、無駄だとわかっていながらも一度店の中を覗く。

しばらくそうして不審人物のようになっていたみどりだったが、約束の6時になった瞬間。

小さなクラクションの音が聞こえた。

音に釣られるようにそちらへ目を向けると、駐車場に停めてある車の中から、慧が手を振っていた。

「…うわ、最悪」

みどりが来てから、駐車場に入った車はいない。

ということは、慧はみどりが来る前からここに車を停めていて、そしてみどりがここにいるのも気づいていて、しかも見ていたのだ。

遠目にもわかる、上がった口角が、観察されていたことを決定づけている。

まったく、悪趣味にも程がある。

むかむかしながらもみどりが車へ向かって行くと、慧がようやく車から降りた。

その姿に、歩道を歩いていた女性たちが一斉に視線を向ける。

みどりもその視線に気づかないほど鈍くは無いし、確かに慧が視線を集めるに足る外見を持っていることも認めている。

けれど、慧がその視線を当然のように受け流しているのもわかり、なんとなく面白くない気持ちが増した。

「どうも」

それなのに、そんな短い挨拶と笑顔向けられた途端、顔が熱くなつた。

これぞ俗に言う“殺人スマイル”というものだろうか、確かに凶器と言っても過言ではなさそうだ。

そんなつもりは全く無いのに、まるで条件反射のようで、みどり自身もその反応に戸惑う。

やはり、慧に対しては分が悪すぎる。

「こんにちは。さ、さよならっ」

「や、それは無いでしょ」

会ってすぐに帰ると決めていた通り、挨拶だけしてくるりと後ろを向いたみどりはしかし、歩き出せなかった。

そんなみどりの反応は予想済みだったと言わんばかりに、慧がみどりの頭に手を載せて、押さえつけたせいだ。

しかも何気に力がけっこう入っているらしく、重い上に痛い。

仕方なく慧の方向へ顔を向けてみれば、笑いを堪えようとして失敗した慧がいて、みどりは渋々負けを悟った。

確かに会うだけという話ではあったが、まさか本当に挨拶だけして帰ろうとするとは、面白い。

恨めしげに見上げてくるみどりが可笑しくて、慧が思わず笑ってしまつと、みどりはむっとしたような、反抗的な表情を浮かべた。

みどりの中には、会いたくなかったという気持ちと、少しは会ってみたかったという気持ちが混在しているように見受けられる。

普段なら、面倒くさがって近づきもしないタイプだろうに、それさえもかわいいと思ってしまうこれは一体何なのか。

どうも、よほどみどりを気に入ったらしい、と慧は頭の片隅で他人事のように思う。

このまま店に入れば隙を見て逃げ出しそうにも見えるみどりを、逃さないように車へ押し込んでしまう。

慧が運転席に回るその間に、やはりみどりはガチャガチャとドアを開けようと試みていたが、それは無理な話だ。

悠々と運転席に納まった後に、助手席から刺さるさらに恨めしげなみどりの視線に答えてやる。

「残念。チャイルドロック掛けてたんだよね」

「…会ったら、すぐに帰るって、言っておいたはずなんですけど」
「会っただけ、っていうのは聞いてるよ」

「だから、もう会ったじゃないですか」

「こんな一瞬じゃ、会った内に入らないでしょ」
むうっと唸り声をあげそうな勢いで、みどりは口を尖らせた。

アヒルの口のようなその形は、人形のようなみどりの顔には少し不釣り合いで、だがそのアンバランスさは可愛らしい。

けれど、キスはしたくないよな、などと考えて、その思考に慧は内心で小さく笑う。

恋愛対象にはなりそうにも無い相手と苦労してこんな風に会ってどうするのか、慧にもわからない。

そもそも恋愛をするつもりも無いのだが、それでもみどりにこうして時間を無理にでも割くことは、やはり矛盾しているように思えた。みどりと関わると、目を瞑っているはずの幾つもの矛盾がごろごろと視界で転がりだす。

それ自体は心地の好いものではないにもかかわらず、それでも関わりを望むのも、既に矛盾している。

だが、今はそんなことよりも、目の前にいるみどりで楽しむことのほうが先決だ。

ごちゃごちゃした思考を隅に追いやると、慧はみどりに向き直った。

最初から、こうなるのではないかとみどりも少しは思っていたが、それでもやはり掌の上で転がされている感が否めない。

頭を押さえつけられたことも、チャイルドロックまで掛けられたことも、結局帰り損ねたことも。

けれど、心の底から慧というのが嫌なわけでは、もちろんないのだ。だからこそみどりは、おとなしく助手席に納まったままにいる。ただ、落ち着かない。

前回病院で会った時のことについて、慧は何も触れようとはしていないから、おそらく忘れたふりをしてきているのだろう。

安堵する一方で、また醜態を晒すことになるかもしれない可能性を危惧しているから、何もかもを素直に受け取れない。

子どもっぽさが強調されるという自覚はあるものの、みどりは尖らせたままの口を元に戻せないでいた。

それさえも慧が楽しそうに見ているように感じるのは、多分勘違いではないと思う。

慧は、一体みどりの何を見てもう一度会おうと思ったのか、それがわかれば少しは気の持ちようが変わるだろうか。

思い切つて聞いてみよう、俯き加減だった顔を上げたら、目の前に慧がいた。

接触は全く無いのに、体格差も手伝つてまるで覆いかぶさってこられたような感覚に、みどりは意味も無く瞬きを繰り返す。

「な、何」

「シートベルト」

みどりの狼狽などものともせず、慧は淡々とベルトを引っ張り、カチリという音と同時に離れた。

シートベルトくらい、言ってくれば自分で閉められるのに、こんな風にされるなんて。

状況を理解したら、遅れてかつと全身の体温が上がった気がする。

その時、ふっと空気が動いた気がして、慧のほうをちらりと窺えば、口元が変に歪んでいる。

「…なんで笑うんですか」

「笑つては、ない」

「でも笑いたそうな顔してます!」

「…かわいいなあ、と思っただけ」

明らかに、バカにされている。

慧はみどりを玩具か何かと勘違いでもしているのではないか、と思うくらいあからさまだ。

男慣れしていないのは、自分でもわかっているだけに、面白がられるのはやはり多少癪に障る。

けれど今の状況では、やっぱり帰るとも言えないし、第一言ったところで車から出られないのだから帰れるわけも無し。

「まあそう怒らない怒らない。うまいとこ連れてくし」

怒っているのだとアピールする前に慧に言われてしまい、みどりは結局何も言い出せずにおとなしくしている羽目になった。

早くも来たことを後悔し始めたみどりは、走りだした車の中から静かに流れる景色を眺めながら、先が思いやられるとため息を零す。

慧が楽しげにみどりの観察を続けていることには、もう気にしていないふりをした。

04（後書き）

再会してみました。

なんてことないシーンですが、今のところの慧とみどりの関係はこんな感じです。

慧がみどり“で”楽しみ^^； みどりはそんな慧にむかつ腹を立てる。

というような感じで、でこぼこな“友情”が育まれてゆきます。

うまいところ、と言われて連れて行かれたのは、一見普通の民家のようなお店だった。

「連れてきていて今更だけど、和食平気？」

「はい、大好きです」

「それならよかった。味は保証するし」

ホテルか何かの高級なフレンチレストランにでも連れていかれるとばかり思っていたみどりは、少しだけ意外な思いがした。

慧に対してなんとなく勝手に作っていたイメージが、少しだけ崩れる。

そのお店は本当に普通の家のようで、一瞬慧の家に連れてこられたのかと勘違いしてしまうほどだった。

かかっていたこれまた普通の“阿部”という表札で、慧の家では無いということにはわかったが。

生まれてこのかたファミリーストランにしか行ったことのないみどりとしては、このいかにも隠れ家的なレストランが物珍しくて仕方ない。

またもや慧に笑われていることはこの際気にせず、好きなだけきよろきよろと中を見回した。

店の外観だけでなく内装も、特別普通の家と変わりは無く、ただ土足で入っていくこととキッチンが大きいことだけが違う。

スタッフはキッチンの中にいる男性だけで、他に人は見当たらない。「いらっしやい」

人の良さそうな穏やかな笑顔がみどりに向けられて、みどりは慌ててお辞儀とともに挨拶を返した。

「こんにちは」

その途端、笑顔に少しだけ変化があったような気がして、みどりは

内心首を傾げる。

けれど、慧が椅子を引いて座るように促したため、その小さな疑問は形になること無く消えた。

阿部（あべ）は、慧の高校時代の同級生だ。

その頃から既に懷石料理を扱う料亭でアルバイトをしており、自分の店を開くという夢を持っていた。

ちょうど二年前、ようやくこの店を開いたのだが、自宅の一階部分でしている上に看板も出していないため、知る人ぞ知るところだ。

口コミで人気はそこそこあるようだが、一日一組限定の完全予約制というスタイルを取っているため、雰囲気は落ち着いた物に保たれている。

物珍しげにどこそこ見回しているみどりは、くると瞳が動いてかわいらしかった。

しかし、阿部の挨拶にお辞儀までして挨拶を返したみどりに対し阿部が笑顔を深めたのを見て、慧は咄嗟に失敗したかもしれないと思う。

この店は、慧のお気に入りだ。

友人の店だから、というひいき目を抜きにしても、味も雰囲気も慧の好きなものだからだ。

だから、みどりを連れていく店を考えたときに一番に思い浮かんだのも、当然のようにこの店だった。

しかしよくよく思い返してみれば、今までこの店をデートの時に使った覚えは無く、連れてきた女性と言えば母親である妙だけだった。今日みどりと会っていることは、慧からすればデートと言うほどのものではないのだが、ここに女性を連れてきた、というのは確かな事実だ。

そして阿部からすれば、その事実だけで十分なのである。

先附を運んできた阿部から意味ありげな視線を食らって、慧は小さ

く嘆息した。

絶対に、何か妙な勘違いをされているに違いない。

「わぁ、きれい……！」

運ばれた器と料理の色彩に目を奪われ、みどりが思わず、といったように感嘆の声を漏らす。

そんなみどりの様子を、阿部は目を細めて見てから、今度は慧に視線を寄越す。

その表情には完全にみどりを気に入ったことが表れていて、失敗したと思ったことも忘れ、自分のものでも無いのに慧は妙に自慢げな気分になった。

見た目もきれいで、しかもおいしい物を食べて満足すると、気分も上昇するらしい。

先附、椀盛り、お造り、焼物、煮物、揚げ物、お食事、甘味、と食事が進むにつれ、みどりの中で慧と会うことについて感じていた嫌な面はどんどん薄れていく。

そして、最後にお茶をいただく頃には、そんなものはまるで最初から無かったもののようにすっかり消え去ってしまった。

「満足？」

「はい、もうすぐ。こんなにきれいでおいしいもの、初めて頂きました！」

ちよつと興奮気味に答えてしまうのも、仕方が無いと思う。

みどりが思わずその気持ちのまま答えると、慧だけでなく、ちよつどお茶を入れていた阿部までもが小さく笑ったのが見えた。

一瞬気恥ずかしい気持ちになったが、素直な感想だったので、取り繕うことはしない。

けれど慧の笑顔から感じ取ったのは、今までの意地悪そうなもの、というよりも、どこか優しい雰囲気だ。

つまりそれだけ、食べ物の威力が大きかった、ということだろう。なんだか慧に上手いこと乗せられてしまったようで悔しい気もする

が、そこが所謂大人と子どもの違いなのだろう、とおとなしく受け入れることにした。

それが、失敗だったのだ。

「この間、有衣ちゃんに会ったよ」

不意打ちのように有衣を話題に出され、みどりの手から危うくお湯呑みが滑り落ちるところだった。

ゴトツ、というテーブルとぶつかる音にはっとして、みどりは慌てて指に力を入れる。

お茶が縁のぎりぎりまで波打っているのを見て、自分の心の中にも同じくらいの波紋が広がっていくのを、みどりは成す術もなく許すしかない。

「ど、どこで…」

「ハルの、えーと、直輝の息子の、運動会で」

有衣が晴基の運動会に行った話は、既に有衣から聞いていた。

そして、その夜に、直輝と気持ちを伝え合い、うまくいくことになったのも、知っている。

まるで夢を見ているみたいな、現実だと信じ切れていなかったあの日の有衣の嬉しそうな表情がみどりの脳裏に甦り、無意識に手に力が入った。

「聞いてた通り、いい子だったな」

いつもなら、有衣を褒められればすぐに食いつくみどりだが、今日は慧の褒め言葉が耳を素通りする。

蓋をしていたはずの様々な気持ちが溢れそうになって、そちらに気が取られてしまったせいだ。

その変化を慧が気づかないわけも無く、そしてみどりは焦れば焦るほど言葉がうまく紡げなくなっていく。

力が入り過ぎて白くなっているみどりの指先を見て、慧は小さく苦笑した。

「うまくまとまって、まあ一安心ってとこだね」

「…そうですね」

両思いで良かった、とみどりも有衣に言った。

有衣と話していた時は確かにそう思っただからそう言ったのに、今、慧の言葉には素直に肯けない。

一言でいえば“複雑”な気持ち、けれどその中身は、きれいなものから醜いものまで種類は様々で、みどりの中では未だ消化しきれないのだ。

身構えていれば少しは誤魔化せただろうものを、完全に油断していたせいで、慧にまともにそれを見せてしまった。

慧が今、みどりをどのように見ているのか不安になり、みどりが慧をちらりと窺うと、しかし予想外に穏やかな視線だった。

目が合った瞬間、安堵感めいたものを感じてしまったみどりは、その事実に関心ひどく慌てた。

慧はそんなみどりを小さく笑うと、不必要に力んでいるみどりの指先をお湯呑みから外し、椅子から立たせるとみどりをソファへ連れて行く。

みどりがソファに座ると、慧は傍にあったクッションをみどりの膝の上に乗せ、みどりの手を宛がわせた。

何かに縋りつきたいような気分だったことを、とうに見通されていたことにみどりは苦く笑い、けれど素直にクッションを抱きしめる。慧の前では、どんなに警戒したところで無意味であり、油断してしまえば壁など即座に取っ払われてしまうのだ、とみどりは改めて悟った。

おとなしくクッションを抱きしめているみどりは、背中を少し丸めていて、震える仔猫のようだ。

有衣を大事に思う気持ちは勿論本物に違いないのに、それ以外の細々とした感情に戸惑って怯えている。

純粹であるがゆえに、醜いと思えるものが自分の中にあることが耐えがたいのだ。

「直輝が、気に入らない？」

「そんなこと、言える立場じゃないです」

「有衣ちゃんが、また傷つけられると思うと心配？」

「それは、…多少」

「有衣ちゃんが、遠く感じる？」

「…少し」

「それが、寂しい？」

「……はい」

だんだんと、返答するまでに時間がかかるようになってきた。

次の質問には、みどりはきつと答えられないだろう、と予想する。

「でも、羨ましい」

慧は、疑問形では無くあえて断定的に言った。

みどりは、何か言葉を発する代わりに、ぱつと顔を上げて慧を凝視した。

みどりの大きな目はさらに大きくなり、うつすらと涙が盛り上がっている。

ああ、泣く。

どこかでそれを期待しているような、不可思議な気持ちで慧を支配していた。

けれどみどりは見開いた目はそのままに、唇をぎゅつと噛みしめて泣くのを堪えている。

まるで、自分のためには泣かない、と決意しているようだ。

期待は外れたのに、なぜか期待以上の反応が返ってきたような、奇妙な心地だった。

心臓が、ぎゅつと痛むような気がした。

慧は咄嗟に、小さなみどりの体ごと慧のほうへ向かせると、間にクッションを挟んだまま、みどりを腕の中に取り込む。

驚いたらしいみどりは体を硬くしたが、体格差が歴然としているせいか、またはクッションで密着度が少ないせいか、暴れたりはいしな

「きれいだな」

「何の話ですか」

「君のこと」

「…どこが、こんな」

「こんな、と言えるのは、きれいな目で自分の中を覗いてるからでしょ。」

俺なんて、もうきれいとも汚いとも感じない。

今、泣くのを我慢してるのも、そうだ。

人のためには惜しまずに泣くくせに。…たまには自分のためにも、泣いたら」

「い、嫌です」

「誰も見てない。俺以外」

「それが、嫌…っ」

心底嫌そうなのが、笑える。

でも、許されたがっているのが見え見えなのが、かわいい。

「…許してあげるから。泣きなよ」

「嫌い。あなた、嫌い…っ！」

悪態をつくみどりの声は、もう震え出している。

じわ、と濡れたような感触がシャツから伝わってきて、ようやくみどりが涙を零したのだとわかる。

まったく、手のかかるお姫様だ、と慧は苦笑交じりにため息をつく。そして同時に、こんな強情な面がかわいいと思うなんてどうかしてる、と慧は口元を歪めた。

05（後書き）

ほんの少しだけ、内面に迫ってみました。

みどりの危惧していた通り、やっぱり泣かされてしまいました。

でも、慧がみどりを泣かせたのは親切心（？）です。

幼くて、きれいで、自分とは違うみどりを、慧はかわいいと思っているのです。

みどりは、結局慧にいいようにされているようで面白くありませんけど^^；

慧と会った二回の間に、一体何度不覚を取っただろうか。

ようやく涙が出切った後、我に返ったみどりは恥ずかしさでなかなか顔が上げられなかった。

みどりが人前で泣いていたのは、多分小学低学年くらいまでだろう。有衣の父親が突然事故で亡くなり、有衣の感情が不安定になった時に、みどりは自然と有衣を見守る役割を受け入れた。

それからは有衣の前ではもちろん、親の前でも泣かなくなったはずだったし、泣くこと自体も稀だった。

つまり、慧と出会うまでは、こんな風に泣いてしまうことなど到底考えられないことだったのだ。

それなのに、よもや慧に会うたびに泣いてしまうことになるうとは、本当に不覚としか言いようが無い。

内側に向いていた意識が外側へ方向を変えると、急に今の状況を認識し、恥ずかしさに加えて一気に緊張が増した。

すっぽりと慧の腕の中に取り込まれて、まるで幼い子どもをあやすように大きな掌に背中をゆったりと撫でられている。

慧からすれば単に宥めているだけか落ち着かせようとしているのだろうが、いったん意識してしまうと妙に落ち着かない。

みどりが体を硬くしたことが伝わったのか、その瞬間に慧の掌の動きはぴたりと止んだ。

「氣い済んだ？」

「え？」

「もう、涙出ない？」

慧の言葉に目を上げると同時にみどりを覆っていた慧の腕が外れ、慧との間に隙間ができた。

それが、なんだか寂しく思えた気がして、みどりは覗き込んでくる慧の視線から慌てて目を逸らす。

「大丈夫、です」

「そうか」

それなら良かった、というように、慧がみどりの頭を撫でてくる。最初は驚いて逃げ帰ってしまったし、二度目の今も勿論慣れたわけではないが、みどりはおとなしくその手を受け入れた。

不覚ついだ、もうどうにでもなれ、というような若干投げやりめいた気持ちもある。

慧の前で泣いて、慧に宥められて、慧に頭を撫でられて、まるで最初に会った時の再現だ。

けれど、会う前はあれほど恐れていたのに、そうなってしまった今は、どこか安んじているような思いがあることも否定できない。

恥ずかしい。

少しの優しさに絆されて、普段誰にも見せないはずの面をこうも簡単に引きずり出されて。

しかも、それに安心している自分さえいるというのが、何とも矛盾している。

それがなんとなく癢で、恐る恐るながらも、みどりは慧の手を掴んで頭を撫でるのを止めさせた。

「これって、癖なんですか」

「ん？ ああ…、うん。どうだろうね」

ちっとも答えになっていない。

またみどりを面白がっているのか、それとも真面目にそう思っているのか、みどりには、慧の表情からは読み取れない。

慧の手を掴んでいる自分の掌が、じわりと汗ばんだような気がして、みどりはぱっと手を離れた。

掌を見つめて、慧は小さく首を傾げる。

誰かの頭を撫でる、なんて癖は当然のことながら無いと思っているし、今まで指摘を受けたことも勿論無い。

しかし、みどりに対してつい出てしまうこの掌にも、確かな理由は

思いつかない。

晴基の頭を撫でてやるのとあまり変わらない、自然な感覚に近いのだ。

「彼女？」

急にかけられた問いに、慧はようやく掌から目を上げた。

お茶を出した後は、何を考えてか姿を消していた阿部が、いつの間にかまた戻ってきていた。

聞かれた内容は、半ば予想していたことではあるがそれでもやはり啞然として、次の瞬間すぐさま否定する。

「まさか」

「ふうん？ でも、それにしてもお前らしくないな。俺に一瞬でもそう思わせるなんて」

言いたいことは十分に伝わり、慧は苦い顔をした。

慧が特定の人間に特別な関心を示すことがほとんど無いことを、阿部は知っている。

その阿部に、少しでもみどりとの関係を疑われたのはつまり、慧がみどりに対しては他と異なる特別な態度で接しているのが明白、ということだ。

しかも恐らくは慧が自覚しているよりも、もっと露骨にそうしているのだろう。

だから、それが慧らしくない、ということなのだ。

らしくないのは、自分でもわかつているだけに、人から指摘されると尚のこときまりが悪い。

それを誤魔化すように、慧としては珍しく、言い訳めいたことを口にした。

「まあ、ある意味特別は特別だ。直輝の彼女の、幼馴染みだからな」「へえ…。そう、か」

阿部は、慧の言葉の何に反応したのか、答えに妙な間を要した。単純に驚いただけではない、その阿部の反応の意味は、慧にははっきりと通じた。

言わなければ良かった。

先ほどの何倍ものきまりの悪さを抱え直してため息をついたところで、化粧室からみどりが戻ってきたため、慧と阿部は瞬時に表情を切り替えた。

泣いた後に、甘いものが欲しくなる人は、多分少なくないだろう。例に漏れずみどりもそうで、何も言わなかったにも拘わらず車がケーキショップに停まった時は、思わずため息が出た。

慧のそのなさに、救われるような、けれど一方では呆れるような、整理のつかない気持ちだ。

メインストリートから少し外れた場所にあるそのケーキショップは、小さめだが品ぞろえは豊富で、甘やかな香りでみどりは幸せな気分になる。

「好きなを選んで」

言われて、ショーケースの中身を見ているのだが、選びきれない。どれもステキで、どれもおいしそうで、なかなか決まらない。

助けを求めるように慧に視線を遣れば、例のごとくみどりの様子を観察していたようで、あの意地悪めいた笑いが復活している。

「全部？」

「バカ言わないでください」

「だって選べないんだろ」

「だからって！」

むきになって言い返すと、慧は堪え切れないうように、小さく噴き出した。

また慧に乘せられてしまった。

もうこのひとほんとに嫌だ、とみどりは心の中で呟く。

「じゃあ適当でいい？ 俺選ぶけど」

「お任せします」

「じゃ、待ってて」

その場で車のキーを開けてくれたので、みどりはその言葉に甘えて

先に外に出た。

その時だ。

突然、背の高い綺麗な女性がみどりの前に表れたのは。

「ねえ、あなたもしかして、慧の彼女：かしら？」

「え、は…はい？」

聞きながらいきなりぎゅっと手を握られて、みどりは硬直する。

身を乗り出すようにみどりに話しかけるその人は、40代後半くらいの年齢に見える、すらっとした綺麗な女性だ。

慧の名前を出したところを見ると、慧に繋がりが有りそうだが、どんな繋がりが全く予想がつかない。

慧の女性関係など知らないし、彼女かと聞かれた気がするが何やら嬉しそうにも見えるので、そちらの関係では無さそうだし。

みどりがいろいろと考えている間に、目の前の女性はみどりの無言を肯定と取ってしまったらしい。

「ね、そうでしょう？ やっぱり！」

「え？ え、いやあの、ちが…」

「そうだと思ったのよ！」

この車に、このお店。まともなデートなら、領けるもの」

話がちつとも見えない。

だいたい、このひとは誰なのか。

それにこの車に、このお店、と言われても、慧の車は普通の国産セダンだし、ケーキシヨップも普通のお店だ。

まともなデートというのだって、今日会っていることをみどりは、いや恐らくは慧だって、デートなどとは思っていないのだ。

「あの…」

「まったく、何も言わないんだから困るわ。

あなたがかわいいからって、独り占めしようとして」

はつきり否定しようと試みようとしたものの、女性は自分の考えの中に埋没してしまってひとりで頷いているし、みどりは困ってしま

う。

ドアに付いているベルが鳴り、慧が出てきた時は、心底ほっとした。会計を済ませて外に目を向けると、見覚えのありすぎる車が目に飛び込んできた。

妙が、もう何年も乗り続けているミニクーパーだ。

確かにこのケーキシヨップは、家族でよく利用する店だが、まさか今日妙と鉢合せることになるうとは思っていなかった。

妙がいつからいたのか知らないがみどりが妙に見つからなければ良い、と思ったのだが、そうはいかないのが世の常だ。

ドアを開ければ、慧の恐れた通り、みどりが妙に捕まっていた。

ベルの音に振り返ったみどりが、あからさまにほっとした様子が目に入り、何を言われていたかだいたい予想がつく。

みどりの手を握っている妙の手をほどいて、みどりを引き寄せると、妙の目の色がまた変わった。

ああ、今の仕草はまずかったかもしれない。

みどりととの関係を否定する口実を、ひとつ減らしてしまった。

「慧、私、前から言ってたわよね。」

誰かいるなら連れてきなさい、って」

この手の話題は、苦手だ。

特に妙がいつもの冷静さを欠いていくから、慧は不本意ながらも完全に受け身に回ってしまうのだ。

みどりがちらちらと見上げてくるのがわかって、どうにか話を終わらせようと口を開きかけた時。

「こんなかわいい子がいるから、見合いなんてしないって、

たった一言じゃない、そう言えばよかったのよ」

その妙の言葉に、慧は言おうとしていた言葉を飲み込んだ。

ちょうど慧を見ていたみどりと目が合い、慧はみどりに心の中で謝ると、わざとみどりの耳元に唇を寄せた。

「悪い、先に車入ってて」

妙に聞こえないように、それだけ言ってみどりを車に押し込む。
急な接触に驚いて、真っ赤な顔で慧を見上げたみどりを見れば、妙
の誤解が増長することはわかっていた。

06（後書き）

慧をちょっとだけ認めた形になったみどり。

みどりを無意識に、でも露骨にかわいがる慧。

でもそのみどりを、悪いと思いながらも利用しちゃう慧^^；
妙を誤解させて、見合い写真を送るのを止めさせる魂胆ですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4903ba/>

青の温度

2012年1月13日23時03分発行